

平成二十九年・国指定重要民俗文化財

長崎くんち 今年のみどり(其の三十)

越中 哲也

私が「ながさきの空」に初めて「長崎くんち」の事を書かせて頂いたのは昭和五十八年九月二十六日発行のながさきの空第一集でした。それで今年の「くんち」奉納踊の事については平成二十三年刊の「ながさきの空」二十二集の「くんち考」を御よみ下さるとよい。

其の一

長崎の開港は一五七一年南蛮船の入港に始まった。当時の長崎の地は大村純忠公の支配下にあり、長崎地区の領主は長崎甚左衛門とある。長崎甚左衛門は一五六三年、純忠と其の家臣二十五名と共にキリシタンに転宗し、長崎開港前の一五六九年には櫻馬場の地にトウドス・オス・サントス教会を建て、一、五〇〇人の信徒がいたと記してある。

新しい長崎の街は、森崎の地(現・県庁の地)に長崎開港と同時期に創建された被昇天の聖母(サン・パウロ)教会を中心に大村町・島原町等六ツの新しい町が開かれている。当時このあたりは「長崎割記」によると「青麦これあり候を刈りて町を立て申候」と記してある。

現在の「長崎くんち」の神輿は諏訪・住吉・森崎の三社であるが、宝永元年(一七〇四)の「くんち」までは諏訪・住吉の二社のみの神輿であった。然し宝永三年からは森崎社の神輿が加わり「三体の神輿の御下り」となった。それまでの「森崎社の祭礼日」は十月ではなく三月四日であったと記してある。

其の二

一五七〇年開港以前の長崎には当然、小さな佛堂や五輪塔もあったが、長崎氏がキリシタンに改宗した時、全ての佛跡は破棄されているが、時として当時の五



長崎くんち長坂の図(1890頃)
(長崎古今集覧名勝図繪より)

保の谷であったと言う。当時は殆どが海路を利用し「飯香浦」が唯一長崎入りの港であった。賢清の第一歩は伊良林郷風頭で、其処にはすでに唐津方面より移住していた草野氏がいた。「やがて諏訪社は新橋町旅人宿芦刈甚左衛門宅に宿りし」と皓台寺開山一庭禪師の直話に記してある。(鎮西大社実録)賢清が長崎に第一歩を踏み入れた一六二三年頃には既に正覚寺、大音寺、大光寺、皓台寺等の寺院が創建され、初代長崎代官村山等安は「キリシタンの事もあつて断罪されていた。次の二代代官は博多の人・末次平藏が任命され、唐船の人達は一六二〇年風頭山の下(現在寺町)に唐寺興福寺を創立。大村藩内に於ては多くのキリシタンが殉教。一六二二年には元和の大殉教が行われている。賢清は此のように各宗教が布教する時であつて、新しい宗派「神ながらの道」―唯一神道―を普及した貢献は大きい。

青木賢清は元和九年(一六二二)頃、長崎に來たり山留役(田川氏)孫左衛門の援助をうけ大村(?)に居住していた公文九郎左衛門に面接し、社仕職の譲り状を受け、長崎の地に諏訪社の「元宮」を造った。その元宮の地については不詳であると言う。又、慶安四年(一六五二)諏訪宮に奉納された梵鐘には

「諏訪大明神之廟、其の基は何の時か知らざる也(原漢文)」

宮司権大僧都 金重院賢清

神主 青木宮内大輔永忠」と記してある。

当時は神佛混淆の時代で、賢清の長男は宝乘院龍寺といい、修験僧(山伏)であったので父の跡をつぎ社僧となり、次男永忠を神主に任じ神樂を社前に奉納したとある。

寛永九年(一六三二)、賢清は京都に上り神祇官吉田家に謁し、諏訪社を長崎の土産神とし、永忠を其の神主とする神道裁判状を賜っている。

寛永三年(一六二六)長崎奉行長谷川権六は青木賢清に社地として西山郷圓山の地を下賜したと記してある。この圓山の地は現在の西山・松森天満宮の地であるとされている。寛永四年、賢清はそれまで住していた佐賀より妻子を長崎に招き、西山の地に住している。賢清は天性聡明で文武に長じ、儒佛に詳しく、英智人に優れ、特に弓術に優れていた。寛永十一年(一六三四)、幕府の方針により、長崎奉行所の行政は一変し、キリシタン禁止と対外貿易交渉史にも一大変化をもたらしている。

この年の九月七日より九日まで、長崎の氏神諏訪社と住吉社の祭礼を行い、高尾・音羽の二人に「舞を奉納」させたと記してある。両女は共に

輪塔片が出土する事がある。

一五八七年(天正十五)六月十九日、九州博多に進出してきた豊臣秀吉はキリスト教の禁止を命じ、それまでイエズス会に大村・有馬の両氏が寄進していた長崎・浦上・茂木の地を没収し、キリスト教の日本退去を命じ、佐賀の藩主鍋島直茂を代官に浅野・戸田の両氏に長崎支配を命じている。以来、長崎の街に於ける寺社の布教が急速に進められたと考えられるが、当時の街の人達は全てがキリスト教徒であり、此の禁教令に対して反発の心があった。当時の長崎の港にはポルトガル船の入港、ローマより少年使節の帰国、イエズス会コレジョよりの出版物があり、一五九二年に秀吉より長崎奉行に任命された村山等安がキリストの信仰者であった事より、山のサンタマリア教会やサンチャゴの病院、コレジョの塔等を創建している。

この間にあつて、神社再興の蒿矢とされるのは、威福院高順が東中町筋違橋の辺り(現在の玉園町)に天満宮の尊像を慶長十二年(一六〇七)に安置したのを始めと記してある。しかし、これを知った街の人達は「石や瓦を投げ破壊した」と記してある。

其の三

諏訪神社関係の古記録によると、長崎の氏神は元和元年(一六一五)、松浦氏の一族青木豊前守永俊の一人子で青木賢清なる人物が長崎に於ける神社復興のためこの地に來る事に始まると記してある。

青木賢清の幼名は彦松丸。青木家は唐津草野氏の一族であったが父永俊のとき種々の事情により青木家は没落、佐賀龍造寺氏(後の鍋島氏)の許に身をよせ、賢清は若くして修験道(山伏)を修め大いに名を馳せていたと言う。この修験道学習の寺(社)が、私は現在の武雄の嶽神社や博多方面の寺(社)であったと考えている。

伝承によると青木氏が初めて、小さき社殿を当地に構えたのは風頭大久博多の出身で現在の古町方面に居住していた人達であったと考えられている。(当時はまだ寄合町・丸山は無く、この時には、まだ傘鉾は造られて無かったと先輩方は言われた。)

現在のように、森崎社の神輿が加えられ「三体の神輿」お下り、お上りが行われるようになったのは、宝永三年(一七〇六)九月七日の「長崎くんち」からであると記してある。

其の四―奉納踊の事

寛文三年(一六六三)三月八日、長崎の街に大火があり町内六十三町、寺社三十三ヶ所を焼失し其の復興は大変であった。この時、長崎奉行所も焼失したので延宝元年(一六七三)立山の地に奉行所を新設、移転している。

町が復興したのは寛文十二年(一六七二)であった。町数は七十七町、特別の町として丸山・寄合・出島の三町とし、これによって氏神奉納踊も丸山・寄合の両町は「長崎くんち奉納踊由来の町」であり、毎年奉納踊を行う事(明治以降は戦前まで丸山・寄合は隔年の踊奉納)、出島はオランダ人居留の地にて町人の居住なき故、奉納踊に参加せず(明治時代以後は参加)七十七町を七分して毎年十一ヶ町、それに丸山・寄合の両町を加えると、江戸時代の「長崎くんち奉納踊」は毎年十三ヶ町が傘鉾を先頭に町役人・乙名・町内一同参加し大変な賑いであった。其の模様は「寛文長崎図屏風」をはじめ、多くの資料が残っている。

戦後「長崎くんち」の奉納踊は全てに就いて変化していると言う人もおられるが、私は現在でも、昔の「長崎くんちの気分」を大いに漂わせ、また大いに感じさせるものがあるとみている。

○今年の踊奉納町

- 一馬町 傘鉾・本踊り(会長瀆崎芳裕氏)
- 一東濱町 傘鉾・竜宮船(会長石丸忠重氏)
- 一八坂町 傘鉾・川船(会長酒井正演氏)
- 一銅座町 傘鉾・南蛮船(会長新ヶ江憲和氏)
- 一築町 傘鉾・御座船・本踊り(会長小野原卓嗣氏)
- 神輿守町 神輿守伊良林連合会(会長金谷繁臣)

○今年の長崎くんち奉納踊解説については例年のように呂紅発行の「長崎くんち―平成二十九年―」(山下寛一編)をみられるとよい。

